

# 浦賀文化

平成19(2007)年1月1日

第9号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

編集・発行:横須賀市浦賀文化センター

〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1

TEL&FAX 046-842-4121

## 『中島三郎助招魂碑』

### 中島三郎助まつりに寄せて

浦賀のシンボルの一つであり横須賀市で最も古い公園である愛宕山公園、その愛宕山のいただきに「中島君招魂碑」があります。中島三郎助を敬愛してやまない浦賀の商人や奉行所時代の知人が中心となり、幕臣として世を去った三郎助の名誉回復と追悼、そして彼を称えるために二十三年忌を期して愛宕山公園を造設し建設した石碑です(一八九二)。

三郎助は、近代化への嵐が吹き荒れる激動の時代に浦賀奉行所の役人として、武士として忠実に生きた人であり、また、技術者として近代日本における造船の幕開け

を担った一人です。

奉行所与力の子として生まれた(一八二二)三郎助は、十四才で与力見習として出仕しています。出仕後まもなく起こったアメリカ船モリソン号の砲撃事件(一八三七)を目の当たりにし海防問題に大きな関心を抱き、大型軍艦の必要を強く感じました。

この間、槍術・宝蔵院高田流、剣術・天然理心流の免許皆伝、幕府砲術方田付流および荻野流の免許皆伝、さらに、西洋式砲術の高島流の免許を一年で取得するとともに、大砲鑄造・砲台建設の知識と技術も習得していま

二十九才で父の跡番代り

と力職となつてから、英船マリナー号(一八四九)、二度のペリー来航(一八五三、四)の際は、日本人として最初に乗船の機会を得て、艦内を詳細に検分・採寸し、質問を浴びせ、その熱心さにあきれられますが、大型軍艦の建造が必要であることを確かなものとしています。

三郎助は、与力・外国応接掛としての交渉にもそつがなかったことは言うまでもありません。これらの働きにより与力・技官としての評価は高いに上がり、新船建造を任せられ完成させたのが、日本最初の洋式軍艦「鳳凰丸」(一八五四)でした。

幕府が海軍力増強のために創設した長崎伝習所一回生として士官心得をはじめ、蒸気機関学・操作を履修、航

## 中島三郎助まつり

開催日  
一月二十七日(土曜日)

場所・住友重機械工業株  
浦賀工場

海士としての学問を修めた後には軍艦操練所の教授方として才能を遺憾無く發揮しています。

時代が大きくなうねりをあげ戊辰戦争に突入したとき、幕府海軍の重鎮として行動し、信念に基づいた壮絶な戦いで二人の息子と十余名の同士と共に遙か函館・千代ヶ岡の土に還つたのは四十九才、戊辰戦争終結の二日前でした。幕末維新の激動の時代が幕を明けようとした年に生を受け、日本が新しい国として一步を歩み出した年に生涯を閉じたといえます。

一方、三郎助は、和歌俳諧・漢詩文などにも秀で、特に浦賀俳壇では「木鶏」の俳号で中核をなし、和歌号は「平守根ひらもりね」として浦賀文化人の一人としての存在を示しています。大衆婦本塚の碑文を著すなど、浦賀の町の人々から敬慕されています。

## 町内の歴史

### 浦賀三丁目(芝生)

【語る人】岡 昌憲さん(岡タクシー)

【浦賀小の前に川が流れていたのを知っていますか?】

浦賀の駅前にはちよつと昔までは、長川橋という橋がかかっていた。現在は暗渠になっているが、浦賀小学校の脇から住友重機械工業株の中を通り、浦賀湾に注いでいた。この河口では、幕末に日本最初の洋式軍艦「鳳凰丸」が建造され、また、日本最初のドライドックが造られ、「咸臨丸」の修理も行われた。

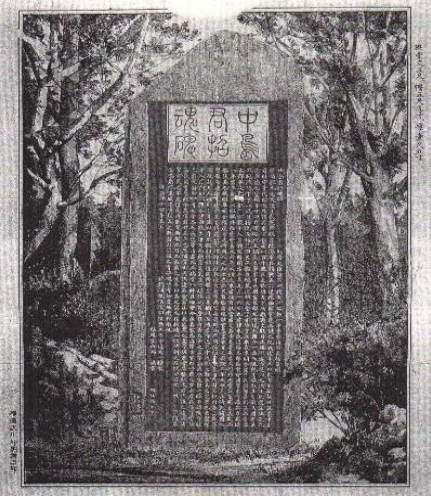
昭和五年に京浜急行(当時は湘南電鉄)が開通し、その後久里浜までの延長が計画されたが、地元の反対や経営上の事情で実現には至らなかった。昭和四十年代初め頃までは車両点検小屋があり、終電が入つてくるとそろそろ寝る時刻だと思つていた。今もその引込み線の線路築堤跡がコンクリートのかたまりとして残っている。初代は自動車の販売や修理をしていたが、新たに自動車二台を購入して大津から三崎までを



現在の浦賀駅前付近

輸送した。電車が引かれることもあつて浦賀町で一番古いというタクシー会社を創めるきっかけになったらしい。当時は一定区間の料金を定めて営業をしていたので、初乗り運賃は不明である。浦賀ドック(地元では会社と呼ばれていた)がなくなり、商店も次々と変わり、当時の賑わいが懐かし

く感じられる物は少なくなつてきた。



愛宕山山頂に聳え立つ  
「中島君招魂碑」  
(石版画)  
「中島三郎助文書」より

三郎助 辞世  
うつせみの  
かりのころもを  
ぬきすて、  
名をやのこさむ  
千代ヶ岡へに

(悠々)

横々道路の完成も見え始めています。浦賀に新たな賑わいの風が吹いて来たような年明けです。

## 東西風

横須賀市制百周年の年が明けました。幕末期に日本の夜明けを担った横須賀で

中島三郎助招魂碑の除幕式に招かれていた榎本武揚、荒井郁之助(三郎助とともに軍艦操練所教授方を勤め、幕府軍艦で函館に渡つた)から、「碑を建てるだけでは喜ぶはずがない」との意見が出され、荒井郁之助の提唱に、榎本武揚、白井義兵衛(浦賀の商人)らが賛同したことが端緒となり開設されたのが「浦賀船渠(株)」です(創立一八九七、操業開始一八九九)。横須賀で民間が設立した最初の大工場浦賀町の発展に大いに寄与してきました。

すが、それ以前から商人の街として賑わっていたのが浦賀でした。岬に浮かぶ燈明堂は、慶安元(一六四八)年に幕府の命により建設され、元禄五(一六九二)年から、東浦賀の干鯛問屋によつて維持管理されたと言われています。大変繁盛した浦賀の様子が目に浮かびます。

昨年九月に、住友重機械工業株が燈明堂手前の遊休地を「ユニマツト」という総合レジャー開発グループに移譲しました。造船工場の閉鎖で沈みかけていたところへ、一筋の光明が見え始めたともいえます。



浦賀の植物

♪ ツクシ 誰の子 スギナの兄弟 ♪

スギナ(杉菜) トクサ科

大前悦宏  
神奈川県  
植物誌調査員

浦賀の地で早春に見られるものの一つにスギナがあります。ツクシ(胞子体は、二〜三月にできます。というのもスギナとツクシは地下深く黒い毛で覆われた根茎によって繋がれています。スギナの胞子体をツクシと呼び、和字で土筆(ツクシ)の形が筆状に似ているので)と書きます。漢字は筆頭菜、漢名は閉荊、中国では、接統草といい親しまれています。



スギナの「花」で緑色の多くの胞子を出す

スギナは酸性指標植物ですが、生育場所を観察してスギナやツクシなどを食べるのは日本人だけといわれます。ウサギ、ウシ、カタツムリなどはツクシを食べますが、ウマはツクシもスギナも食べません。適切にあく抜きをしたりさらしたりして、摘みたてのツクシのほろ苦さを初春の宵に味わうのもよいものです。

スギナで思い出すこと、それは私の第二の故郷広島では、スギナのことを「ピカドンソウ」と呼んでいました。アメリカによる原爆投下後、科学者の一部の人々は草木は五十年から百年は生えないと言ったのです。恐怖のどん底にあった人々に向かつてそんな発言をしたのです。しかし、実際は数年たつとスギナやアカザ類は元気に生えてきたと母は言っていました。「日当たりの良い太田川のほとりに真っ先に、それ以来、少年時代から「学者」の言うことを絶対視すること、少し疑問を持つようになつたことを覚えています。

小学生の頃、浦賀の駅前にまだ川が流れていて、今の横浜銀行の辺りに「スバル座」という映画館がありました。「ギクとイサム」や「綴り方教室」を、そこで観たことを今でもはっきりと覚えていて、お祭りや山車と一緒に『芝生』から練り歩き、気が付いたら『田中』まで来てしまい、母が青くなつて探したこともありました。

笑話一題

そんな思い出のある『浦賀』に最近感じることは、貴重な文化財が失われつつあることです。奉行所や干鯛問屋の名残は残念ながらほとんど失われてしまいました。浦賀文化センターに所蔵する古文書や展示物などの資料で歴史の面影を偲ぶことは出来るのですが...

歳書

佐々木 譲著  
角川書店

『くろふね』  
古い体制を打ち破るために動いた、男の知恵と熱き戦い！  
日本人として最初に近代に接し、最後のサムライとして生涯を終えた中島三郎助。鎖国を守り続けた日本に、艦隊を率いて開国を迫り、転機を導いたペリー提督。黒船に乗り、新しい日本の幕を開けた二人。



歴史 語り座・浦賀 ⑨

郷土史家 山本 詔一

ら十六日にかけて来航した異国船は浦賀沖を通過し、金沢沖まで乗り込んで停泊した。

ペリー二度目の来航

嘉永六年(一八五三)という年は、浦賀だけでなく日本中を驚かせた大きな出来事があった年だった。それは、この後現代にまで続く時代への第一歩でもあった。

六年の九月から東浦賀大ヶ谷の蛸浦(かきがうら)の奉行所の御船御用達であつた勘左衛門の地所で、幕府の命による軍艦造りが始まった。建造場所は菱矢来で囲われ、幕が巡らされ、入口には提灯が立てられて一般の人の出入りが厳しく制限された。もちろん中で作業に従事する人にも厳重な注意・禁止事項が言い渡されていた。それをみると第一は「火の用心」で、特に「くわえキセル」は絶対禁止であつた。次が建造場所への出入りのことで、諸職人・人足は腰に鑑札をつけ、退場するときは会所へ鑑札を置いていくことになつてた。

また、就業時間は基本的には自然の明るさがあるうちで、早朝から手元が見えるまでと定められ、作業の開始、昼食、終業などはすべて太鼓か拍子木の合図で知らされた。もちろん就業中の飲酒や喧嘩口論も禁止事項であつた。これをみると今までの徒弟制度で、仕事の段取りは親方任せという時代から脱却し、近代的な労働環境に移行していく段階が感じられる。それにして、急ピッチで作業をしていくという意気込みが感じられ、これには浦賀やその周辺の人たちが相当数関わつてたことを窺わせ、その後の造船の街・浦賀の始まりが感じられる。

明けて七年、松がとれ、各商店で蔵開きが行なわれた十一日の午後、伊豆の沖合に異国船七隻が見えたという連絡が奉行所へもたらされた。十四日か

幕府はペリー艦隊が再来した際には、浦賀を交渉の場として設定してあつたので、浦賀奉行所の役人たちは、浦賀を通過したペリー艦隊を追い、停泊場所を前回と同じ位置に移すように求めた。しかし、江戸により近い場所での交渉を望んでいたペリーは浦賀を交渉場所にする要望を聞き入れることはなかつた。

十九日には、幕府・外交交渉掛(林大頭、江戸町奉行井戸対馬守、御目付鵜殿民部少輔等)の役人が浦賀へ入つた。浦賀は宿場町ではなかつたので、宿屋は東浦賀の徳田屋等数軒しかなく、多くの人は商人の家や寺社を借りて泊まつた。この役目でこられた方々の賄い代金は東浦賀村負担分で、百五十兩近くになつており、相当な負担であつた。

二十四日には、燈明堂近くの屋形浦に交渉所が建てられた。この間も浦賀を舞台にして交渉をするようにペリー側に求めたが、浦賀沖は船が安全に停泊できないことを理由に断られて、二十九日は外交交渉掛の一行も浦賀を引き払い、神奈川(横浜)へと向かつた。このとき屋形浦の交渉所も解体されて、神奈川へと送られた。

こうして、外交の場は浦賀から神奈川へと移つていった。この作業には奉行所の役人はもとより、多くの浦賀の人々が関わつたことがわかる。



幕府外交交渉掛の宿泊所の一つとなつた西叶神社